

ひ父の没地に行きたいと言つております。

日本を発つてフリップキンの首都マニラに着き、ツゲガラオに着いた時、警察官の護衛のもとサンタマリアアパリと慰靈が進み翌日が私の父が没したリサールに着いた時は感慨無量でした。福山からのお供え物の酒、饅頭、おもち、水と供え慰靈祭が始まり、その時には涙が出てたまりませんでした。

当方は治安が良くないと事で警察官の方々に大変お世話になり有りがたく思いました。

独立歩兵第三二一大隊壕内での作業は、はじめに埋もれた壕入り口の土砂やジヤングル化した周辺の雑木をパワーショベルで取り除き、小さな発電機と懐中電灯をたよりに壕内に入り、メイン通路の横に広がったポケットと呼ばれる所をスコップと熊手で掘り下げ、遺骨の搜索をしました。

また現地の日本人ガイドの方ツーリストそして、日本遺族会の方々に厚くお礼申し上げます。

政府主催の平成十六年度、第四次硫黄島遺骨収集調査派遣団（平成十六年二月十六日から三月一日）に日本遺族会の一員として参加し、硫黄島に行つてきました。

硫黄島は東京から南へ一二五〇キロメートルの太平洋に浮かぶ孤島で、面積も二十二平方キロメートルの火山島で、この小さな島に数一〇〇個の地下壕が掘られ、その長さは十八キロメートルにも及ぶものです。

昭和二十年二月十六日から始まつた米軍による攻撃は熾烈を極め、地上の建造物は跡形もなく破壊されました。すでに補給路を断たれていた日本軍はそれでも日間に反撃し、一ヶ月間持ちこ

たえましたが、米軍の圧倒的な火力の前に遂に玉砕し二万名を超す戦死者が出たそうです。

「一柱でも多く連れて帰つてあげたい」という思いが強く、崩落の恐怖心は感じませんでした。

千鳥ヶ原地区対空機関砲陣地郡跡地

「どんなにかこの日を待ち続けたことか、「出来るだけ早く家族のもとに帰してあげたい」と思ひながら作業にあたりました。

この場所でも十一柱の遺骨と多数の武器と弾薬、生活用品が発掘されました。

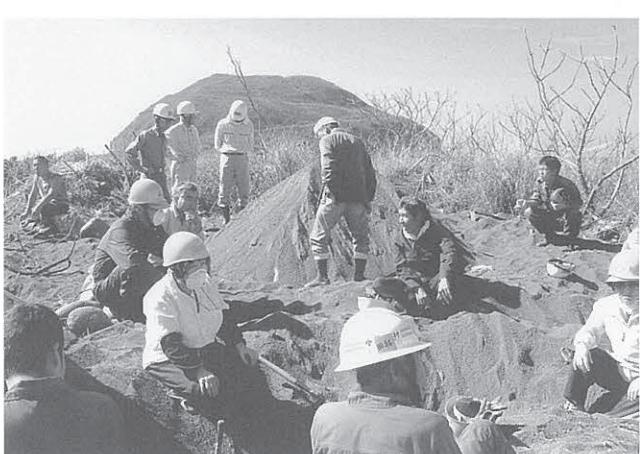
六十年前の二月に熾烈な戦いが繰り広げられたこの千鳥ヶ原、日陰もなく、三十度を超える炎天下での遺骨収集作業でしたが、補給路を断たれ食物も水もなく栄養失調状態で戦った当時の兵士の苦労を想像すると、この暑さで音をあげるわけにはいかないと自分に言い聞かせながら、一柱でも多く遺骨を見つけてあげたいという思いを強く感じました。

ここでは、頭から足の先端まで完全な姿の遺骨が一柱収骨されましたが、頭蓋骨は鉄兜と共に撃ち抜かれており、上前歯の金歯だけが光つておりました。また、ボタンも元の位置に残つており、胸の辺りから印鑑と認識票が足元には軍靴も出てきました。この方は六十年間

吹きながら群れをなし、振り向けば赤や黄色の原色の美しい花が咲いています。硫黄島の海は碧く鯨が海岸近くで潮を進むと、天井には土の層に亀裂があり、いつ崩落するか分からぬ状況でしたが

硫黄島での遺骨収集作業

呉市遺族連合会 石田 宏



の方々は、六十年前どんな想いでこの美しい光景を眺められたことでしょう。

今回収集した二十柱の遺骨と、一次、二次、三次の収集団が収集した三十柱の遺骨は丁寧に洗骨され、私たち収集団員の胸にしっかりと抱かれ「海ゆかば」の曲が流れる中、海上自衛隊硫黄島航空基地隊の儀仗兵による捧げ銃に見送られ、遺骨は六十年ぶりに硫黄島より故国日本に帰つてまいりました。

翌日、東京千鳥ヶ淵戦没者墓苑で遺骨の引渡し式が行われ、遺骨を棒持して入場した私たちの列に数人の老婦人が歩み寄られ、ご主人を亡くされたご遺族の方たちだったのか皆さん涙ながらに「ありがとうございました」と深々と頭を下げられました。

遺骨収集は最後の一人になるまで終わらない、今後も要請があれば、何時でもどこにでも飛んで行き、今日の平和の礎となられた先人の御靈に報いるため、元気な今のうちに遺骨の収集作業で奉仕したい。

ある遺児の軌跡

平成十七年十二月

豊田郡大崎上島町 村上範明

私が三十六歳に成った時、たつた一枚の赤紙で家族を残して行かなければならなかつた父の切ない気持ちを察して胸の苦しくなつたことを覚えていきます。どんなにか気がかりになりながら行つたことだらう

昭和十九年五月三日赤紙によつて招集され、そして一年三ヶ月後の昭和二十年

八月九日フイリッピンで死亡しました。その赤紙には次の事が書かれていました。
（要点のみ）

臨時召集令状

村上高利

昭和19年5月10日8時
佐世保海兵团に出頭の事

「お前は長男だからお母さんを助けてこの家をしつかり守つて欲しい。家族みんながしつかりしておれば大丈夫だか

ら」と教え諭すように言つた言葉が今も脳裏に焼きついています。

出征の朝、多くの村の人に日の丸の旗と軍歌でおくられ「國のために働く喜びを感じています。滅私報國尽くします」と短い挨拶を残して出て行きました。これが最後の姿でした。

その後、毎日陰せんを供えどこでどんなことをしているかしら、元氣でかえつてくれたらいいのにと言うのが私達の毎日の会話でした。

（国民服を着て出征し、私服は送り返され、そのポケットの中に赤紙があります）

父は菓子職人で小さな店を持つて、母を相手に早朝より夜遅くまで働いていました。その赤紙を私達は怨念の遺品として仏壇におさめています。

父の死はいつたいなんだつたのだろうか。心ならずも戦場にかりだされ、命を投げ捨てざるをえなかつた多くの人々の犠牲は何だつたのだろうか。

この私達の悲しみを子や孫には絶対に味合はせてはならないという思いを込めてこの一文を記しました。

その間赤紙が来たことを知つた地域の人々は次々と来て「この度はお國のために働くことが出来て本当におめでとうござります」と紋切型の挨拶をしてくれました。母は陰では「何がおめでたかろうに」と表の顔と裏の顔を私達には見せていました。

出征前の四人家族の夕食のおり父は私に「お前は長男だからお母さんを助けてこの家をしつかり守つて欲しい。家族みんながしつかりしておれば大丈夫だか